

わたしたちの人権

誰もが人間として生きていくうえで 侵すことのできない当然の権利 これが『人権』です

子どもたちの人権作文

12月の人権旬間にあわせて、子どもたちが書いた人権作文をご紹介します。

人権学習を通して考えたこと

矢部中学校 2年 児玉 智也



僕は、二期の人権学習で、「三月三日の風」を見ました。その中で印象に残ったのは、西光さんが小・中学生の頃の場面です。西光さんの友だちは、西光さんを仲間外しにしています。守ってくれるはずの先生でさえ、「生意気だ」と言ったり、わざときつことをさせたりしていました。僕も、少し似た経験があります。それは、僕が五歳で、鹿児島県の保育園に通っていた頃のことです。僕が、

給食の時に野菜をこぼしただけで、先生から頬をたたかれたことがありました。そのことで、僕は保育園の前までは行くものの、先生が怖くて家に帰ったり、保育園を休んだりすることが多くなりました。僕はどうしても耐えられなくなり、隣の幼稚園に行くことになりました。そこでは友だちもたくさんできて、楽しい生活を送りました。しかし、前の保育園の先生のことの原因で、大人が怖くなり、おとなしい性格になってしまいました。

小学生になり、宮崎に引っ越ししました。その小学校は、児童が全部で八百人のマンモス校でした。知らない顔の人しかいなかったため、全然楽しくありませんでした。特に、辛かった経験があります。昼休みに、同じクラスの男の子たちがドッジボールをしていました。「僕も一緒にしたい？」と聞くと、そのうちの一人が、「お前は弱いからかたからんで」と言われました。僕はとても悔しかったけど、何も言えませんでした。そのことがあってから、僕

は毎日昼休みは教室で過ごすようになりました。

小学二年生になり、僕は矢部に引越しました。矢部小のみんなはとても明るく、僕に「サッカーしよう」と声をかけてくれました。とても嬉しかったです。さらに、健斗君と奏太君が、僕を「ともさん」と呼んでくれるようになりました。六年生も「ともさん」と言ってくれるようになりました。そのことで、僕の性格はどんどん明るくなっていきました。以前の辛い経験を打ち消してくれるような毎日を過ごすことができただけで、矢部小に来て良かったなと思いました。

しかし、矢部で差別されてきた人々がいることを人権学習で知って驚きました。もっと深く知りたいたいと思い、五・二・三集会に行きました。そこで、部落差別のおかしさについての発表を見ました。それを見て、僕は「この矢部に差別はいらない」と思いました。十月にフィールドワークに行つて、人権センター長や支部長から話を聞きました。道が狭く、水道もなかったとおっしゃっていました。子どもたちは、学校から帰って何度も水をくみに行つていたそうです。子どもたちは、とてもきつかったと思います。学校に行けないことで勉強ができず、文字を書けない子どももいました。そのことで本人がづらい思いをしたり、周りの人が差別をしたりするから、部落

利」を誰も奪うことはできないと思います。

この二つのことから、命の大切さについて考えることができ、「誰にでも生きる権利がある」ということを強く感じました。そして、差別をなくしていこうという意識を改めて考えることができました。これから今回考えたり、思ったことを行動に移していきたいと思っています。

これまでの私、これからの私

矢部高等学校 2年 松田 茉弥



私はこれまで小学校、中学校で学んできました。小学校のころは

周りにすぐあわせようとして、いじめる側にいたと思います。毎回人権集会や人権について考える機会に考えることが一つあります。それは、「口だけじゃ何も変わらない。」ということなんです。口だけでなら何度でも、差別はいけない、差別は絶対するな、と言えます。そんな時は、私も含めてみんな口だけで満足した気になっていないのではないかと思います。

小学校のころ、クラスのみんなにあまりよく思われていなかった子がいました。その子は何もしていないのに、その子と机をくっつけないよ

差別はひどいと思いました。人権学習を進めていく中で、他にも差別されてきた人たちのことを知りました。西光さんや石川さん、矢部の人々、水俣の人々などのことです。僕は、差別をなくすのは簡単なことではないと思います。しかし、身近にあるいじめや差別からなくしていきたいと思います。これから僕は、人の良いところを見つけて、差別をなくす言動をしていきます。

「生きる権利」について

清和中学校 2年 緒方 さくら



昨年七月に、「相模原障がい者施設殺傷事件」がおきました。このニュースは全

国で放送され、知っている人も多いためです。私は初めてこの事件のことを聞いたとき、とてもショックを受けたのと同時に、なぜこういうことがおこってしまったのだろうかと思いました。毎日のように報道される事件の様子を聞きながら、いろいろと考えさせられました。

この事件は、知的障がい者福祉施設「津久井やまゆり園」でおきました。たくさんの人々が抵抗もできず、犠牲になりました。その被疑者は元職員の人ということでした。その中で、衝撃的なものを見ることになり

うにするなど見ていて辛いこともありました。しかし、私は怖くてみんなに何も言うことができませんでしたが、その友達は小さいころよく遊んでいて、今思うと本当に申し訳ない気持ちでいっぱいになります。また、あの時何も言えなかった弱い自分が腹が立ちます。あの時何も言うことができなかった私はいじめていた側なんだと今なら気づくことができません。あの時、行動に移して差別を止めることができなかったことが、今私の一番の後悔です。もっとその子とたくさん話をして心の支えになるべきだったと思います。

中学校に入ってからは人権学習の時間も増えて、いろいろな差別についても学習しました。一番驚いたのが、面接の時の質問で家族のことを聞くことが差別の一つなのだという

ことでした。高校の人権教育で学んだことは、部落差別のことです。ただその地域に住んでいるだけで、差別の対象になることは本当におかしいことだと思えました。人間が自分で間違った認識を作り出して、そのせいで違う誰かを傷つけている。いつもその繰り返しだなと思いました。

相手のことを考えないで、自分勝手な行動をしようと、違う誰かを傷つけてしまうということを、日常生活の中でしっかりと考えて行動すべきだと思えます。

ました。それは被疑者が書いた手紙です。手紙の内容の一部に「彼らが不幸のもとである確信を持ってた。」などの言葉がありました。その中でも、「意思疎通がとれない人間は安楽死させるべき。」という言葉が一番頭の中に残りました。とてもひどい言葉で、障がい者の方を差別しているものばかりで、悲しくなりました。

しかし、それと同時に、これが差別の現状なのではないかとも思いました。障がいがあったり、生活上の違いや不都合があったりするだけで、生きる権利まで奪われるのはおかしいと思いました。

二年生になって学習したハンセン病に対する差別と似ていると思いました。ハンセン病は、ライ菌と言われる菌に感染して発病する病気です。病気が治っても、その時の後遺症で、顔の変形などや手足の麻痺が残ります。そして、国による隔離政策などにより、ハンセン病患者の方々が差別をされていました。時に、とてもひどい言葉を浴びせられたり、手紙が送られたりもしました。

でも、それは過去の話で、今は終わつたかというところではありませんでした。今回の授業で、インターネットの書き込みに、見た目からハンセン病患者さんを差別する内容が書き込まれているのを見ました。相模原の事件の手紙についての書き込みを見ると、被疑者が書いた手紙に同意

そのために私ができることは、例えば、自分が書いた作文を読んだり、聞いたりして下さった方々に、差別についてもっと知ってもらい、差別をなくすための行動を一緒に考えようこともできます。そうすることでこのような差別をなくすことにつながっていくと思います。

私は昨年起きた事件をきっかけに、授業で「ハンセン病」について学んだことを通して、人権について考え、命の大切さに改めて気づかされました。だから、身の回りの友だちや家族、そして自分の命を大切にしていきたいと思っています。誰もが「生きる権利」をもっているのに、差別をすることで、人の「生きる権